

それぞれの感性で それぞれの「月の都」



すずき大和先生のまんがWS開催

更級への旅

松尾芭蕉が歩いた 更科紀行街道の今・その27

「月の都」としての当地をまんがで描いたらどんな世界が現れるか。千曲市の観光キャッチフレーズ「芭蕉も恋する月の都」を考案した漫画家のすずき大和さんによる「月の都・まんがワークショップ」が計五回の連続講座としてこのほど開かれました。主催は千曲市ふるさと漫画館、千曲市文化振興事業団、千曲市教育委員会、小中学生四人と大人八人が受講しました。

二十一日に現れる月をJR姨捨駅で見ることでした。千曲川を挟んで向かい側の鏡台山から顔を出した昨年の中秋のすばらしい月（シリーズ104参照）が脳裏に焼きついているので、ぜひ当地の本物の月を、子どもたちに見てほしいと思いましたが、全身で「さらしな・姨捨の月」を味わってほしいと思いました。

ワークショップ（WS）は八月下旬から十月下旬にかけ原則、日曜日にふるさと漫画館での開催だったのですが、九月二十二日は水曜で平日、翌二十三日が秋分の日で休日だったため、この日にしようかとも考えましたが、松尾芭蕉をはじめ、古来各地の人が当地の月を見にやってくる日だった中秋の日をあえて選びました。国立天文台の予想によると、鏡台山付近からの月の出は午後五時十五分ごろ。受講者はますふるさと漫画館に集合し、マイクロバスで姨捨駅に向かいました。平日の夕方にもかかわらず全員が参加、子どもたちもみんな来てくれました。

かつて駅事務所だった部屋を地元姨捨地区のみなさんが週末、来訪者のガイドをボランティアとする拠点に改装した「くつろぎの駅」で座学をした後、これもJRが崖側のホームに新たに作った展望台に移動し、月の出をみんなで見ました（左下の写真）。しかし、鏡台山の山頂には雲がかかっています。雲の流れが速いので、いずれと期待しましたが結局、月の出の時刻になっても晴れませんでした。

出るか出ないかみんな話題にしているうちに、更級地区（旧更級村）の音楽グループ「柵田バンド」のみなさん（詳しくはシリーズ104、118、126など参照）の演奏が始まりました。メンバーのみなさんが仕事を早めに済ませ来てくれました。「野に咲く花のように」「カントリーロード」など、おなじみの曲のほか、新曲「さらしな月見歌（右に掲載アルファベットはギターのコード）も披露してくださいました。節回しが楽しく、子どもたちも大喜びでした。

そしてすっかり闇夜になり、最後の「さらしな月見歌」の演奏が始まりました。この歌についてはシリーズ61参照の演奏が終わった後、上空を見上げると、雲間に丸い月が顔を出していました。思わず「出たー」と叫んでしまいました。わずかな時間でしたが、確かにお月見ができました。演奏が雲を吹き飛ばしたのか、それとも姨捨駅が音楽と人間であまり楽しそうなので「何事か」とお月さんが雲を掻き分けたのか。



ワークショップの別の回についても少し。受講生は主催者からスケッチブックを一人ずつ用意してもらっており、自分がイメージする「月の都」のイメージを描き付けました。私も一冊もらいました。刺激的だったのは、自分の絵をみなさんに披露し、みなさんがどれが好きか、どういうところが好きかを述べ合ったことです（上の写真がその一場面）。そんな月の世界、そんな月の味わい方もあるのかと感心しました。

「描いたものは、たくさんの人に見てもらおうと、頭が柔らかくなりそうです」「きれいなこと考えていると、こういう絵が描けます」とすずき大和先生。笑いも絶えない講座でした。子どもと大人が一緒にワークショップということで、最初はどなるか心配でしたが、描かれた絵について、そんな見方、視点もあるのかと、かえって新鮮な発見がありました。女性は色をつけるけれど、男は黒一色という違いも興味深かったです。

多い人は十枚以上、描いていましたが、最終的には一枚だけ選んでもらい、自分で額に入れました。千曲市ふるさと漫画館に二〇一一年三月まで展示されています。最上部の写真。それぞれのタッチで、それぞれの月の都が出現しています。

発行 二〇一〇年 十二月十日
編集 さらしな堂
（代表・大谷善邦）
〒三九九・〇八一三
長野県千曲市大字若宮二八四・六
（旧更級郡更級村）